

2023年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2024年4月30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 外国語学部・教授

(氏名) 齊藤 園子

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	国際ネットワークの構築を促進する国際交渉力の育成					
	合計	使用内訳 (単位:円)				
交付決定額	600,000	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	600,000	0	6,229	23,200	124,239	446,332
執行残額	0					
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	
	外国語学部・教授		齊藤 園子		研究代表者	

研究分野：グローバル教育

キーワード：持続可能な開発目標 (SDGs)、SDG17 (パートナーシップで目標を達成しよう)、SDG5 (ジェンダー平等を実現しよう)、模擬国連、国際交渉力、対話、ダイバーシティ、文化的アイデンティティ

研究成果の概要 (和文)

本研究は SDGs の達成を加速させることに着目する SDG17 「パートナーシップで目標を達成しよう」に関連する研究である。SDGs の達成には「グローバル」にネットワークを構築できる国際交渉力や対話力を持った人材の育成が求められている。本研究は国内外の市民社会活動に関わる情報収集を行うとともに、学生と協力して、市民社会と連携する活動を展開し、実践を通じた研究活動を推し進めた。具体的には次が挙げられる。

- 学生のキャリア開発・中高大連携：外部講師を招いて、国際職員のキャリア形成に関わる講演会や、中高大連携となる国際交渉力のトレーニングに関わる意見交換会を実施。
- 市民団体との連携：依頼を受け、連携して北九州市主催の講演会を開催。
- 市民社会の活動への参画：北九州市男女共同参画センター・ムーブ主催の「ムーブフェスタ 2023」において昨年度に引き続き、市民企画事業を出展。(出展に際しては主催

者より別途助成金を受けた)。なお、本事業内で紹介した英語による文学作品の邦訳については、改訂した上で、本学外国語学部紀要に投稿した(後述のとおり)。

- 国際的な教育活動「模擬国連」への参画：国内外の模擬国連大会への学生参加を推進、教育アドバイザーとして参加。(英語模擬国連国内大会/ニューヨーク大会)
- 国際学術交流の推進1：済州大学校で開催された、KCLA (Korean Comparative Literature Association) 国際学会に担当ゼミ生と参加し、パネルを出展。
- 国際学術交流の推進2：海外の研究者による講演会・意見交換会を担当ゼミ生と連携して開催。
- COIL*型教育の推進：本学協定校の済州大学校(韓国)と文藻外語大学(台湾)の教員と連携し、COIL 型授業を実施。* Collaborative Online International Learning
- 学生間の国際交流を推進：模擬国連ニューヨーク大会の準備活動に関わり、カナダの MacEwan University の教員と連携し、同大学の学生との学生間交流を促進。
- 国連本部(ニューヨーク)で第68回国連女性の地位委員会を傍聴。関連の会合に参加している市民団体と意見交換。

研究成果の学術的意義や社会的意義

① グローバル教育の開発

国際ネットワークを築く国際交渉力を持った人材の育成という実施手段の開発に関わる研究を進めることができた。特に、COIL 型教育とアクティブラーニングを取り入れた教授法や教材開発に関わり、有効な方向性や効果的な手法を確認することができた。

② グローバル人材の育成

学生の協力を得て大学の枠を超えた教育環境を創出し、実践を通じた取り組みを加速的に進めることができた。実践を通じて得た大学の枠を超えた社会とのネットワークは、協力した学生にとっても、キャリア開発や今後の国際的な場での活動の布石となり得るものである。研究代表者の担当授業での還元も期待できる。

③ 国際社会や市民社会の取り組みへのコミットメント・社会貢献

(1) 持続可能な開発目標(SDGs)へのコミットメント(2) 国連アカデミック・インパクト(UNAI)へのコミットメント(3) 本学の海外の協定校との連携促進(4) 市民社会との連携(5) 中高大連携

1. 研究の背景

本研究は、公募テーマのうち、申請区分「SDGs」に該当する研究課題である。2021-22年度に2か年にわたって学長選考型研究費Aによって遂行した「国際的な取り組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等(SDG5)の推進」の発展研究である。また、科研費(基盤B)研究「模擬国連を中心としたグローバル教育における国際交渉力の調査研究」(2018~2022年度)(18H00684)の成果を踏まえている。SDG5に加え

て本研究が特に着目したのは、SDGs の達成を世界の人々の連携によって加速させることに着目する SDG17「パートナーシップで目標を達成しよう」である。SDG17 は SDGs の実施手段に関わる目標で「持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」というものである。SDGs の達成には世界の人々の有機的な結びつきが不可欠であり、その連携を加速するのは「グローバル」にネットワークを構築できる国際交渉力や対話力を持った人材である。本研究では国際ネットワークの構築を促進する人材の育成に寄与するグローバル教育のあり方を探求した。

2. 研究の目的

SDGs の達成には、行政や企業、市民社会や学術機関など様々な主体の間に有意義なパートナーシップを構築することができる人材が不可欠である。国内外の様々な主体について広範で適切な知識を持ち、柔軟な姿勢と発想でパートナーシップを展開させる国際交渉力を持った人材が必要なのである。本研究は、国際ネットワークを築く国際交渉力を持った人材の育成というグローバル教育の開発面（教育内容、教授法、教材）から SDGs の達成に寄与することを目指すものである。また研究過程で実践的に得られる人的資源やネットワークには、様々な分野において、日本と海外の人材が協働するネットワークの布石となり得る広範な波及効果が期待できる。合わせて、申請者の担当授業での還元、学生のキャリア開発、海外の協定校との関係促進、UNAI へのコミットメントという側面からの社会還元が期待できる。

3. 研究の方法

本研究では、英語模擬国連とジェンダー平等に関わる市民社会の活動とに焦点をあてて研究を進めた。模擬国連は国連の意思決定過程のシミュレーションを可能にする国際的に認められた教育プログラムである。本研究代表者はこれまで、英語模擬国連に関わる教育研究活動に従事してきた。その成果を踏まえ、本研究では模擬国連を、国際ネットワークを構築するための訓練の場と位置づけ、学生の模擬国連活動への参加促進を図りながら、学生の協力を得て研究を遂行した。またジェンダー平等の推進に関わるこれまでの研究成果を踏まえて、ジェンダー問題に取り組む国内外の市民社会の活動の調査を実施するとともに、大学の枠を超えた学生参加型の活動を企画運営した。

4. 研究成果

英語模擬国連やジェンダー平等に関わる国内外の市民社会の取り組みに焦点をあてる研究活動を通じて、グローバル教育の開発面で、グローバル人材の育成に資する教育内容や教授法の考究を進めることができた。特に、COIL 型教育とアクティブラーニングの手法について、有効な方向性や効果的な手法を確認することができた。教員が主体となって学生のアクティブラーニングを促進する仕組みだけでなく、学生自身が海外の学生とのネットワー

クを自ら展開させていく環境の創出についても考察を進めることができた。また市民社会との連携、中高大連携、他大学との連携といった、多方面で大学の枠を超えた教育環境に働きかけたことで、学生の、キャリア開発や国際的な場での活動の布石となり得るネットワークのあり方についても考察を進めた。研究代表者の担当授業での還元も期待できる。

なお以上の取り組みは、持続可能な開発目標（SDGs）へのコミットメント、国連アカデミック・インパクト（UNAI）へのコミットメント、国際共同研究の推進、本学の海外の協定校との連携促進といった面からも意義を持つ活動になった。

関連する研究論文等は下記のとおりである。

- 論文（単著）

Sonoko Saito. “Farewell to Illusions: ‘The Story of an Hour’ and ‘The Storm’ by Kate Chopin.” *Kitakyushu University Faculty of Foreign Studies Bulletin*, no. 158, 2024, pp. 1-16.

- 翻訳（共著）

井上鈴乃、楠芽依、高木愛佳、虎谷吏、仲宗根巧、和田翼、齊藤園子（監修・監訳）「【翻訳】「一時間の物語」(原作：ケイト・ショパン)」『北九州市立大学外国語学部紀要』第157号、2023年、71-75頁。

- 国際学会発表

Sonoko Saito. “Exploration of Forms of Human Bonds: Marriage, Family, and Community in *The Ambassadors*.” The 9th International Conference of Henry James Society, Kyoto Garden Palace and Doshisha University, July 2023. (English)